

---

私は、レズなんかじゃない。

シェル

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私は、レズなんかじゃない。

### 【NZコード】

N8123Y

### 【作者名】

シール

### 【あらすじ】

私は、小学校から高校の大親友に

…恋をしてしまった。

## プロローグ（前書き）

レズ物です。

レズ等に偏見がある方はみないでください。

読んで感想をくれたら嬉しいです！

## プロローグ

私の名前は、今野美和子。

良く友達にはみわちゃんって呼ばれる。私には大好きな親友がいる。彼女の名前は、小岩美咲。小学校から高校まで全部同じクラスの幼なじみだ。席もいつも近い。仲良しすぎて、皆にレズなんじやないかつて言われたこともある。私は… そうなれたらいいなあつて思つてるけどみーちゃんはそんなこと言われても引くだけで親友つてこともなくなつちゃうんだろうなあ……。

私はそれだけはイヤだった。ずーっと親友なのに、そんなことで親友じゃなくなつたらイヤだもの。

だから、この想いは私の心の中にしまつておくれ……私はレズなんかじゃない。つて……

だけどある日、私の部屋でいつも通りお話していると私は、とんでもないことを言つてしまつたの。

## 大好きな親友

私は馬鹿だ。なんてことを言ってしまったのだらう。

みーちゃんが、「みわちゃん何か悩み事でもあるの?」なんていうから私は自分の想いをみーちゃんに伝えてしまった。昔からの付き合いだから、悩みがあるなんてことはお見通しみたいだった。

みーちゃんは黙つて聞いてくれていた。

私は、みーちゃんが大好きだつてこと。恋人になりたいつてずっと想つていたこと。

全て、全て話してしまつた。

ああ…終わつた。これで嫌われたよなあ……。

美咲「それで……? みわちゃんは、どうしたいの?」

え?

美咲「私がそんなことで、みわちゃんのこと嫌いになると思つてゐ? 話してくれて嬉しい嬉しいよ……」

私はその言葉に安心して泣きやうになつた。

みーちゃんはなんでも私のことお見通しなんだなあ。

美和子「私はね、この事を話してみーちゃんは引くんじゃないかつて怖かつたの。ずっと心の中に閉まつてしまつて決めてたの…でも言えてスッキリしたよ…」

ニッコリ笑つた私をみーちゃんはみつめていた。

すると……

みーちゃんは、私の唇をみーちゃんの唇で塞いだ。

ビックリした。

頭の中が真っ白になつた。

長いことキスをして、2人は唇を離した。

美咲「ごめんね……？ あたしもみわちゃんが大好きだよ。 今日から恋人になろっか……？」

うそ……ホント？

嬉しそうでボーッとしてしまつた。

しばらくして我に返つて、私はみーちゃんにギュウッて抱きしめた。

美和子「大好き、大好き……みーちゃん大好き……？」

そのまま2人はしばらく抱き合つた。

## 幸せって？

私とみーちゃんは付き合つてになつた。

大好きなみーちゃん。一生大切にするつて私は誓つた。

その日は、バイバイをしてみーちゃんは自分のお家に帰つていつた。  
明日ペアリン買いに行こうねと約束をして。

毎日お話をしているのに私たちは毎晩のよつて携帯でお話をしていた。  
いつも携帯でお話をするのは23時くらい。

しかしその日は、何故か電話がかかつてこなかつた。

……寝ちゃつたかな……。毎日のよつて電話をしていたから可笑しな  
氣分だつた。

なんだらう、この氣持ち……

嫌な予感がした。

でも私にはどうすることも出来なかつたため、お風呂に入つてご飯  
を食べて眠りについた。

不安なまま寝たから目覚めが悪かつた。

みーちゃん何かあつたのかな。

朝ごはんを食べて学校に向かう。

途中にみーちゃんちがある。いつも一緒に行つてるからポンポンを  
押した。

だけど誰も出ない。

なにがあつたの……？あのあと、バイバイしたあと、なにがあつたの  
……？

私は心配で心配でたまらなかつた。  
携帯も繋がらない。

なんで、なんで……  
どーしたの……？

私は泣きながら混乱しながら、学校へ走って向かった。

生あるつて何だらうか。

みんなちゃんと席についている。だけどみーちゃんがない。皆は「あれ、みーちゃんと一緒にじゃないの?」などと聞いてくる。そんなの…私が知りたい。

担任が入ってきた。

早速の報告に私は耳を疑つた。

『皆に大事なお知らせがある。

小岩…は、昨夜事故に合い意識不明の重体らしく入院中だ。』

うそ…………。頭の中が真っ白になつた。

先生、嘘つて言つてよ……。

「嘘つて言つてよ、先生つ?/?」私はいつのまにか叫んでいた。いつもおとなしい私がこんな行動を取るのが初めてだつたため、先生もクラスメイトも全員驚いていた。

私は泣きながら訴えた。

「誰がそなことしたの?犯人は誰つ?ねえ、教えてよ先生!先生  
つつ…………」

先生の胸倉を掴んで、叫んだ。叫びまくつた。

友達が私を落ち着かせようと必死に慰める。

先生からは一旦離れて床に座り込んだ。

……折角付き合えるようになつたのに。

誰かがこの幸せを奪つた。

私は授業を受ける体力も無く、保健室にずっといた。  
方針状態の自分。……気持ち悪い。

下校時間のため、鞄を持って学校をでた。

まだ、涙がとまらない。

みーちゃん頑張れ。

みーちゃん生きろ。

みーちゃん生きて。

みーちゃん大好き。

色々な想いが私の頭の中を横切つた。

翌日、私は学校を休んでみーちゃんがいる病院へ向かつた。

## 「じめんなさい…

ベッドに横たわっていたみーちゃん。ベッドで皿を殴っていたみーちゃん。動かないみーちゃん。

昨日の夜、バイバイしたあと事故にあつたんだ…  
みーちゃんのお母さん…

母『まだ意識が戻つてないのよ…貴女の家から出ですぐには車にひかれたの…』

みーちゃんのお母さん、私のせいで…? いや、そういう風に聞こえる…

美和子「じめんなさい、じめんなさい、じめんなさい…?」

私は謝りながら泣きながら病室を出た。私のせいだ、私のせいだ…。  
もひ、みーちゃんに会わせる顔がない。もひ、会わなによいにしよう…。

病院をあとにして、私はペアリングを買いに行つた。  
2つで1万円くらいのを買つた。

そして手紙付きでみーちゃんの病室に置いて家に帰つた。

私は引きこもつた。

学校にも、外にも行きたくない。死んでお詫びするしか…ない…  
よね…



死んだらどうなる……？

私は家にある包丁を手に取った。  
自分の方に向けた瞬間。

『おい、なにやつてるんだよ？』

いきなり男の人に入つてきて私を止めた。涙を流しながらその人を見上げる。

彼は青柳賢。あおやしきけん 20歳の大学生。この人は私の家の隣に住んでいる人だ。

私の両親がいないときは良く面倒をみてくれていた、優しいお兄ちゃん。

4つも離れていてしつかりしている。

勉強もいつも教えてくれている。だけど、そんな優しいお兄ちゃん……今日はなんだか怖かった。

賢『なにをやつてるんだ、まったく……呼んでも誰も返事しないから心配して来てみたら……何があつたかしらないが自殺なんてすんな。わかつたな。』

賢にい、久しぶりにみた怖い賢にい。

私は安心したのかお兄ちゃんに抱きついて大声で泣いた。

美和子「賢にいちゃん、はなし……聞いてくれる……？」

賢『ああ、聞いてやる。ゆつくりでいいからな？』

ゆつくり、本当にゆつくり今までのこと全て話した。親に言えないことは全て賢にいに言ひ。みーちゃんと付き合つことになつたことも、もうろん言つた。

賢『そうか…。なあ、美和子。お前が死んだら悲しくなる人がいるんだぞ？俺だつて、お母さんやお父さんや、その…みーちゃんつて「も田が覚めて美和子がいなかつたら寂しいんじゃないか？』

お兄ちゃんが熱く語つていた。

確かにお兄ちゃんの言つとおりかもしない。死んだらみーちゃんと会えなくなるもんね…

美和子「やつだつた、私はなにをバカな事してたんだり？お兄ちゃんありがとう、本当にありがとー！」

賢にいは笑顔になつた私の頭を優しく撫でてくれた。

しかし翌日から嫌な日々が始まる。

友達からメールがきた。

【みーちゃんを殺したつて、ホント…？】

え……？

みーちゃんのお母さんが学校に、皆に言いふらしたんだろ？ 確かに私が殺したようなものかもしない。だけど死んでない。みーちゃんは死んでない。みーちゃんはまだ生きてる。

【なに言つてるの？ 殺してなんか、ないよ？】

とメールを返したがそれ以来メールが来なくなつた。大親友なのに殺すわけないじゃな……。

夕方お兄ちゃんに止められたばかりだつたけど、ハサミで腕を切るしかなかつた。

切るとなんだか気持ちが楽になつた。

今はお母さんもお父さんも会社で家には私しかいなかつた。ティッシュで血を止めながらリビングに向かつた。リビングにはお兄ちゃんがいた。

美和子「あれ、どうしたの……？」

賢『切つたのか……？』

美和子「うん。切らないと気が休まらないで……」

そう言つとお兄ちゃんは怒鳴り散らした。

賢『それで死んだらどうするんだよ？ お前本当にダメなやつだよ。美味しいオヤツ持つてきて一緒に食べようかと思つたのに。。』

私はビックリした。

お兄ちゃんつてこんなに怖かつたつ……。

美和子「う、『めんなさい』お兄ちゃん私を見捨てないで……友達にも見捨てられたら私にはお兄ちゃんしかいないのつ！ もう、しないからお願いつつ……」

賢にいは泣いている私をソッと抱きしめてくれた。暖かかつた……。

かねとお兄ちゃんは私にキスをしてきた。

え.....

しばらくしてお兄ちゃんの方から離れていった。

そのあとお兄ちゃんは口をゆっくり開いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8123y/>

---

私は、レズなんかじゃない。

2011年11月27日21時54分発行